令和５年度国立市市民表彰 社会福祉功労

“しょうがいしゃが暮らしやすい”まちの実現を目指して

三井　絹子（みつい　きぬこ）氏

幼くしてご自身がしょうがいをもち、地域で暮らす中でこれまでに何度も障壁にぶつかり、重度しょうがいしゃの自立の練習の場として「かたつむりの家」を開設しました。しょうがいを持っていても地域であたりまえに暮らせる”しょうがいしゃが暮らしやすいまちの実現“を目指して、人権を訴え守り、地域で生活していくために日々活動を続けています。

かたつむりの会発足のきっかけについて教えてください

４８年前、しょうがいを持つ方は施設や親元にいて、外に出られる状態ではなかったために、車いすで街中を歩く姿は見られませんでした。

前身のかたつむりの会は、昭和５０年（１９７５年）に国立市につくった団体です。現在は「ＮＰＯ法人ワンステップかたつむり国立」として活動しています。

私自身が施設で非人間的な扱いにもがき苦しみ闘い、死に物狂いで地域に出て、しょうがいしゃの自立支援の活動を始めました。どんなに重いしょうがいを持っていても”自立は出来る”と立ち上げましたら多くの重度のしょうがいしゃが、私も自立がしたいと駆け込んできたのです。

現在までにかたつむりを通して１００人を超えるしょうがいしゃが、地域に出て自立をしています。

会の具体的な活動内容について教えてください

かたつむりは、しょうがいしゃの自立支援を主に行っている団体です。

その他にも地域の中でしょうがいしゃが当たり前に生きて行けるように、市や都や国と闘い地域でしょうがいしゃが生きる土台を作ってきました。今あるバリアフリー法や差別解消法などができる何年も前から、市内の道路、歩道、公園などの公共の場や公共施設、商店街など、国立市のあらゆる場所に赴き、車いすでは入れない壁に何度もぶつかり、話し合い、バリアフリーを広げてきました。

国立市とは長い間様々な話し合いを重ね、国立市は重度しょうがいしゃが生きやすいまちになりました。現在では人権を共に考えられる市役所となりつつあります。

自立支援の活動を通して印象に残っていること及び嬉しかったことを教えてください

かたつむりに自立練習をしに来た人はしょうがいが重い人ばかりで、この人が地域で暮らせるの？と言われている方ばかりでした。目で話す人、指で文字を書く人、おでこで話す人、様々な重度のしょうがいしゃが自立の練習をして、今でも地域の中で生き続けています。それが一番うれしい事です。どんなしょうがいを持っていても地域の中で生きて行けるという事をしっかりと証明してきたからです。

今後、どのような国立市（国立というまち）を期待していますか

国立市は現在「しょうがいしゃがあたりまえに暮らすまち宣言」条例があり、平和の条例があり、人権の条例と、子どもの条例も作られています。

そして今、とても良い市役所になっているのは市長を先頭に、今の職員の人達の力が大きいと思います。この先もずっと、このしょうがいしゃが当たり前に暮らすまち、そして人権が尊重されているまちが続いていく為に、様々な人権を子どもの頃から知り、学び、関われるまちにさらになって行くように、みんなで考えて行けるまちであり続けて欲しいです。

今後の活動及び展望などを教えてください

人権がいつも学べる博物館の様な物を作って差別や排除、様々な歴史を見て、聞けて関われる様な学びの場所を国立市に作って行きたいです。

▲日本社会事業大学にて、
講師として学生に講義をする三井さん